

## 宝石を探して

龍郷町立赤徳小学校 六年 坂元 遊野

「宝石って、どこにあるのだろう。」

私は、何度言ったか分からない言葉を口にした。私は今、奄美の守護をするための試練をつけている。名前は、ネリヤだ。

一カ月前、百年に一度の守護の持ち場の総入れ替えがあった。守護の持ち場というのは、精霊が、地域ごとに守護する場所を決め、百年の間守るのだ。守護する場をもらうには、自分の好きな場所を選んだ後、精霊の長の所に行って、持ち場をもらっているか決めるのだ。長は一目見て、その持ち場に適しているか分かるのだ。選ばれなかったら、また百年待たないといけない。私は迷わず奄美を選んで、長の所に行った。長は私を見ると、一言「よいだろう。」

と言った。私はうれしくてたまらなかった。でも、持ち場をもらうには、これだけじゃだめなのだ。長から、一人ずつ試練を言い渡され、その試練をこなさなければ、持ち場はもらえないのだ。「ネリヤ、そなたは、奄美の地に降りて、二つの宝石を見つけるのじゃ。青、緑、白の宝石だ。真実を見つければ、必ず見つかる。期日は半年後の夏至じゃ。」

「二つの宝石を見つけること」とは言っても、そんな簡単に見つかるわけない。いろいろためして探しているが、なかなか見つからずに三カ月がすぎた。

あと四カ月。私は試練の内容を思い出しながら、集落の上を飛んでいた。すると、一人の人間が下で手をふっているのが見えた。

私はおどろいた。なにしろ精霊が見えるのは心がとてもきれいな者だけなのだから。興味を持って近づいてみると、その人間は、私と同じ十三才くらいの女の子だった。まあ精霊は人間と比べると、ちょっと年をとるのがおそいのだが。その子は、白い白い砂浜を思わせる肌をしていて、光の加減で若葉色のソテツの葉のような色になる、森を思わせる髪を持っていた。そしてその瞳は、角度によって水色だったり深い藍色になる、奄美の海そのもののような色をしていた。その子は

「渡井の名前は亜舞海、精霊さんの名前は何ていうの。」  
と言った。私の姿が見える人間がいた。私は驚いたと同時にうれしくなった。私は、人間と話すなんて初めてだから、ちょっとびっくりした。

「私の名前はネリヤ。でも、どうして話しかけてくれたりしたの。」  
すると女の子は、少しはずかしそつに、

「精霊さんに会って、友達になりたかったの。」

私はびっくりしてしまった。今まで友達なんていなかったから。そしてうれしくなって思わず、

「いいよ。友達になろう。」  
と言ってしまった。

これが私たちの最初の出会いだった。この時から毎日会って一緒に遊んだ。時にはずつとしゃべっていたり追いかけっこをした

りした。空を飛んだりもした。初めは亜舞海は飛べなかったが、私が精霊の力を分けてあげると、少しずつ飛べるようになった。

「うわあ、こ、怖い。」

と言っていた亜舞海も、練れてくると自由に飛べるようになった。奄美上空を一周したり、雲に乗って寝たりもした。和ついは試練のことなどすっかり忘れていた。

残り二カ月。いつものように二人で遊んでいると、ふと亜部海が、

「どつしてネリヤは奄美に来たの。」

私は答えようとして思い出した。試練のこと。

「どつしたの。」

突然声をかけられ、我に返った。私は、正直に全てのことを話した。亜舞海は、しばらく黙って聞いていた。話し終わると、突然立ち上がった亜舞海は、

「じゃあ、一緒に探しましょう。」

と言った。私は迷った。これは私の試練なのだから私が見つけないといけない。でも精霊の長は試練について一人で見つけるとは言っていないし、亜舞海は私が断ったって探すに決まっている。結局私は、

「一緒に探そう。」

と言ってしまった。二人ですぐに探し始めた。最初は空から探した。でも見つからなかった。だから次は、森や人家の所を歩いて探した。それでも見つからなかったので、海にもぐって探したり

もした。

残り二週間。探しても探しても、宝石は見つけられない。一休みしようとして、二人で湯湾岳のてっぺんにあるガジュマルの木の枝にこしかけて、奄美をながめていた。ふと、亜舞海が、

「海がきれい。まるで宝石みたい。」

とつぶやいた。その一言で私はピンときた。

「分かった。青い宝石が何なのか。奄美の海だ。きれいな青、美しい奄美の宝。」

と私が言つと、亜舞海が、

「そうね。きつとそうだ。」

と言つた。

「じゃあ、緑の宝石は、奄美の森だね。」

私が言つと、

「うん、豊かで美しい森は、奄美の人たちにとっての大切な宝だ。私たちはうれしくなって、手をとりあって喜びました。その時、私はふと思いました。奄美の人たち。亜舞海だって奄美の住人なのになあ。」

「じゃあ、白い宝石って、何だろう。」

と亜舞海が言つた。私は、

「白っていつたら、雲・貝から、後は白い砂浜くらいかなあ。」

と言つた。

「もう一度、集落を回ってみよう。」

亜舞海がそう言つた時、私の耳ににぎやかで楽しそうな声が飛び

込んだ。ちょうどお昼で、集落にはたくさんの方がもどってきていた。そういえば、亜舞海と私と会ってから、一度も昼食を食べに帰っていないなあ。私たち精霊は、食物をとらなくてもおなかはずかないし平気なのだが。私はしょっちゅうヤマモモや桑の実、野いちごを見つけたら食べたり、サトウキビをもらって食べたりしている。亜舞海も同じことをしているのかな。

今日訪れた集落には、私が見える人が多かった。

「精霊さん。黒砂糖、食べる。」

「精霊さん。お昼ごはん食べていかない。」

「精霊さん。ごくろつま。」

「精霊さん。この奄美を守ってね。」

この集落の人は、私が見えるんだ。うれしいなあ。奄美の人たちは、こんなにやさしかったのだと、私は今ごろ気付いた。奄美の人たちの心も分からずに、私は奄美の守護をしようとしていたのだ。そう考えたとき、分かった。白い宝石とは、奄美の人たちの心なのだ。私がそうつぶやくと、亜舞海は

「分かって、よかったね。」

と言って、手をふって帰った。

そして、約束の日。精霊界にもどった私は、長のところまで行った。長は

「三つの宝石を見つけられたか。宝石を出してみなさい。」

と言った。私はどうしても、奄美の守護をしたい。チャンスは一回限りだ。私は緊張しながら言った。

「三つの宝石は、形あるものではありません。青の宝石は、奄美の美しい海。緑の宝石は、奄美の豊かな森です。そして、白い宝石は、奄美の人たちのやさしい心そのものです。」

すると、長は、ほほ笑みながら、

「よく分かったな。そのとおりじゃ。これが分からなければ、守護などできぬのじゃ。それが分かったら、そなたはきつとつまく守護することができらるぞ。」

でも、でも……。答えが分かったのは、亜舞海のおかげだ。私は迷ったが正直に、

「亜舞海の助けがあつて分かったのです。」

と言った。すると、思いがけない言葉が待っていた。

「亜舞海なら、ここにいろぞ。」

長がやさしく言った。えっと思つて、周りを見回したけれど、長と私しかいない……。と思つたら、長となりが輝いて、まばゆく光り出した。そして、光が消えたと思つたら、亜舞海がそこにいた。

「ごめんね。だまっついて。私は、奄美の生き物たちの精神体なの。海や森などの生き物たちの。そして、この奄美そのものの意志が集まつてできたもの。それが私なの。」

私は、思い当たる節があつた。奄美そのもののような容姿。「奄美の人たち。」と言つたり、食べ物を食べなかつたり。

「ネリヤ。この奄美を守つてね。機会があれば、また、会えるから。」

そう言ったとたん、亜舞海は光に包まれ、次の瞬間消えていた。

「ネリヤ。そなたに、奄美の守護を任ずる。亜舞海の言ったとおり、この美しい奄美をしっかりと守るのだぞ。」

待ちに待った、長の言葉だった。しかし、そう言われても、ちっともうれしくなかなかった。亜舞海がいなくなってしまった悲しみのほうが、大きかったのだ。私は、泣きながらも、奄美を守ることをしっかりと胸にちかった。

あれから、もう九十年もたった。でも、見た目は九才しか年をとっていない。今でも、ふっと亜舞海が現れて、

「私はここだよ。」

なんて言って、出てくるような気がする。実際には現れることなんてないのだけれど。ああ、次の奄美を守護する精霊はだれだろう。しっかりと守ってほしいな。この美しい奄美を。